

京都陶磁器釉薬研究会の紹介

平成21年度の京都陶磁器釉薬研究会は、当センターと京都陶磁器協同組合連合会が共催し、事務局は当センターの基盤技術課（材料・機能評価）が担当しています。当陶磁器釉薬研究会は、平成9年に開始し、今年で13年目に入ります。開催回数延べ78回、参加者数は通算約2000名となり、この間使用した資料等は約1000点に及びます。

当釉薬研究会は基本的には、会員相互の勉強会的色彩を持ち、メインテーマは、「陶磁器における釉薬理論と実際」という内容です。平成21年度は、技術センター5階研修室において、下記予定に掲載してある課題（サブテーマ）を順次実施しており、現在第5回まで終了しています。終了会の資料等が必要な方、参加をご希望の方は、基盤技術課（材料・機能評価 矢野）までご連絡下さい。

平成21年度の京都陶磁器釉薬研究会

開催日時	課題(講師)	副題および講義概要
(第1回) 平成21年 6月24日(水) 15:00～16:30	工芸産業の近代化とデザイン 佐藤 敬二 先生 京都府中小企業特別技術指導員 京都精華大学教授	「琳派の継承者・神坂雪佳にみる京都のかたちと文様」 ものづくりやデザイン、また生活者にとって伝統とは何でしょうか？ 神坂雪佳は、浅井忠とともに明治・大正・昭和に於いて「遊陶園」や「京漆園」を結成し、陶磁器や漆器のものづくりを牽引しました。当時の陶磁器や漆器を考察しながら「京都の伝統とライフスタイル」について考えたい。
(第2回) 7月22日(水) 15:00～16:30	ガラスと釉薬 大田 陸夫 先生 京都府中小企業特別技術指導員 京都工芸繊維大学名誉教授	「ガラスの生成とその物理化学的性質」 釉薬はガラスに分類される。本講では、結晶、ガラスの融点とガラス転移温度、粘度(流動性)と温度依存性、熱膨張とクラック(貫入)、ガラスの分相(白濁化)、液相粘度とガラス化領域、ガラスの力学的性質(弾性率、強度、硬度、屈折率)などをガラス成分とガラス構造から説明する。
(第3回) 8月20日(木) 15:00～16:30	含鉄釉薬 横山 直範 先生 京都市産業技術研究所 工業技術センター窯業チーム	「各種含鉄系釉薬の調製と焼成条件について」 伝統的な釉薬には鉄成分を含む釉薬が最も多く、伊羅保釉・黄瀬戸釉・青磁釉・鉛釉・天目釉・柿釉・鉄赤釉などがよく知られています。中でも青磁・天目系釉薬は焼成条件により色合いや釉性状がさまざまに変化します。これら含鉄系釉薬の調製方法と焼成条件との関係を資料や釉薬テストピースで紹介します。
(第4回) 9月16日(水) 15:00～16:30	伝統的焼きものの技術の再評価 石田 信伍 先生 京都府中小企業特別技術指導員 京都工芸繊維大学名誉教授	「固体－気体間の相互作用に注目したFeSO₄の熱分解機構」 柿右衛門の清明な赤絵には硫酸鉄の熱分解より得られた高純度かつ微粒のベンガラが使われている。焼きものや触媒界など粉体の分野では、金属酸化物粉体はほとんど例外無く、易分解性の硝酸塩や炭酸塩より得る。硫酸塩が使われたのは希有な例である。ベンガラの生成機構を熱力学計算などで検討し伝統的技術の評価を試みる。
(第5回) 10月21日(水) 15:00～16:30	地域資源を利用した製品開発 大久保 一宏 先生 地方独立行政法人東京都立産業技術研究センター開発本部材料グループ主任研究員	「三宅島火山灰を利用した製品開発」 各地で地域資源を利用した特色ある製品づくりが行われている。当センターにおいても2000年に噴火した三宅島の火山灰を利用して様々な製品開発を行った。ガラス製品の開発をはじめ、焼き物(粘土、釉薬)の試作、機能性材料の開発などの事例を紹介しながら、資源の特性を利用した製品開発手法を解説する。
(第6回) 12月16日(水) 15:00～16:30	陶磁器釉の色調と窯内雰囲気 竹内 信行 先生 京都府中小企業特別技術指導員 京都工芸繊維大学大学院准教授	「種々の雰囲気中で焼成した鉄釉の色調と鉄の化学状態」 陶磁器釉に含まれる鉄の化学状態は焼成雰囲気にによって大きく変化し、それに伴って鉄釉の色調も様々に変化する。鉄の化学状態変化を拡散反射スペクトル、電子スピン共鳴スペクトル、X線光電子スペクトルなどの分光学的データから明らかにして、焼成雰囲気が鉄釉の色調に与える影響を解説する。

【お問い合わせ先】

京都府中小企業技術センター
基盤技術課 材料・機能評価担当

TEL:075-315-8633 FAX:075-315-9497
E-mail:kiban@mtc.pref.kyoto.lg.jp